

# おばあさんの涙

——『剣掛かり』の唄について——

石川 博行

## はじめに

数年前だが、獅子舞の中でも『剣掛かり』が終わったときに、涙ぐんでいたお婆さんがいたことがあった。その時はそれ程気にしなかったが、その後に演じられる演目の時には、そのお婆さんがいなかった。「何に感激したのかな、きっと『剣掛かり』の持つ、笛と獅子の舞の雰囲気感激したのだろう」と思った程度で、「なぜ『剣掛かり』だけを見て帰った」のかは、気にしてその時は帰った。

『剣掛かり』は、見ていて気づくが、真剣を加えてあるいは持っの舞と笛の音には、他の演目にはない重々しい雰囲気が感じられる。しかし、獅子舞の演目には、女獅子の取合を男獅子が演ずる「女獅子隠し」があり、この演目は結婚を題材にムラにおける男性と女性の関係を演じているのがよくわかる。このことを考えると『剣掛かり』にも芸態からは題材を見ることはできなかったが、何か秘密が隠されていると思える。ここでは涙の原因を『剣掛かり』の唄の歌詞に探してみる。

## おばあさんの涙 Part 1

涙したお婆さんを見たのは、埼玉県秩父郡皆野町三沢字下三沢の三沢の獅子舞である。三沢の獅子舞では、『剣掛かり』は「四句割り」と呼ばれる。芸態は、2頭の男獅子が剣を加え、花笠の間に隠れた女獅子の回りを仲立ちに引かれるように、お互いに声をかけながら、前へ飛び進む。また、舞に伴う笛の伴奏は、ジゴトでは「トーヒー トーヒー トーヒートー トーヒー ヒーヒー トーヒートー」と繰り返される。この場に実際にたたずむと、重々しく何か不安になる気持ちを感じるのは私だけではないと思う。また、この重<sup>(1)</sup>苦しさの後に仲立ちが唄を歌い、いくらか獅子が静かになる様には、ほっとした安心感を感じる。ぽっと来て感じるのはこの程度で、これ以上の感じを受け取れるのは地元の人、この涙したお婆さんである。したがって、この差に涙の原因があるであろう。

仲立ちは、プロローグに

① 廻れ廻れ水車遅く廻りて関に迷うな

と観客に説明するように歌う。ゆっくりでも何事もなく前へ進めばムラ(イエと置き換えても良い)が平和であると伝えているのである。次に

② 我親の植えて育った姫小松一枝たおめ腰を休める

と歌う。我々は先祖から育ててきたムラで平和に暮らしていると伝える。このように仲立ちが歌う唄には、ムラで生きる者に必要な教訓が歌われていることがわかる。

ドラマは、注連がはられた空間にくりひろげられる。

③ 思いもよらぬ朝霧がおりてそこで女獅子が隠されたよな

と歌う。女獅子がいなくなったと事件が起った（ムラの平和が乱された）ことを伝え、本題に入る。

④ じゅうさからつれた姫をかぞわれて遊びながらも尋ねたいもの

と歌う。女の子の13才は、ジュウサンマイリ<sup>(3)</sup>とあるように大人の仲間に入る年で、結婚できる年齢でもある。大切に育ててきた娘が連れさらわれたと、事実を知らない親の気持ちを代弁する。

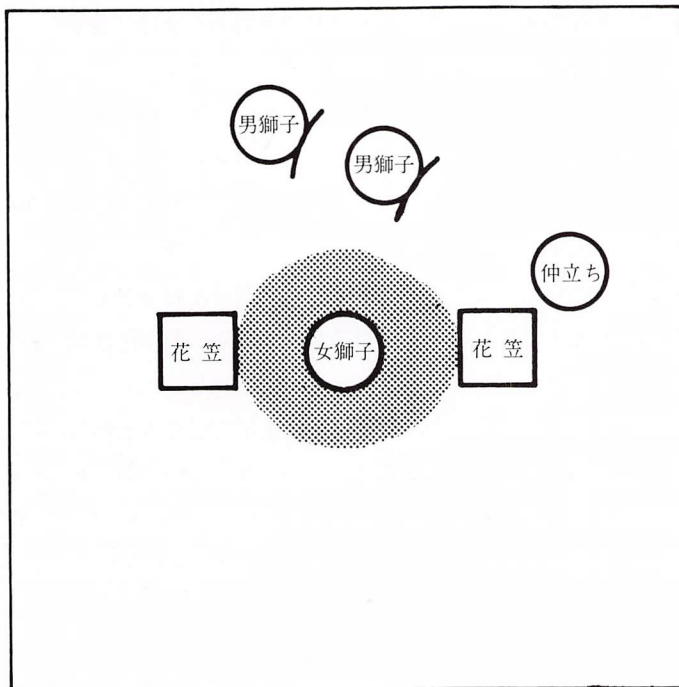
⑤ 奥山の岩に女獅子が巣をかけて岩をくどいて尋ねたいもの

と歌う。娘がいなくなったのは駆け落ちであった（事件は結婚問題）といい、親が娘を連れて帰ろうとする気持ちを伝える。

⑥ ともだちの腰にさしたる小わきざしそれをくわいて尋ねたいもの

と歌う。剣で脅しても連れて帰りたいが何も言わないから帰って来いと親の気持ちを伝え、「ともだちの…」と歌って、問題が生じたら第三者に間に入ってもらえと伝える。ここで、女獅子は花笠の間に隠れ、男獅子は剣を加える。

⑦ 山雀がさしこの内でもどりうつそれをみまねてもどりうたう



と歌う。娘は山雀が鳥籠のなかでとんぼがえりをするのを見て里心がつき、帰りがたがっていると伝える。

⑧ とうても尋ね今一度よな

と歌う。親も娘も今ここで妥協しなければならないと観客に同意を求めている。

⑨ 天竺の逢いそめ河原のはたにこそしくせ結び神のたたりだ

と歌う。駆け落ちした二人は里心がつき、中に入った人はお互いに譲りあえといい、親は「祟りだ」と騒ぎこじれきってしまったように聞こえる。ここで、男獅

「四句割り」の空間

子は剣を外し、女獅子は表に出てくる。

⑩ 誠にもしくせ結びの神ならば女獅子男獅子をむすびあわせろ

と歌う。でも、縁結びの神であるなら神の力で結婚させろと、神に頼る様子が見えてくる。しかし、こじれきってしまった中から、少しは解決への兆しが見えるようになる。次に

⑪ 中立ちが中で心をつくさより出でて我等肩をならべろ

と歌う。第三者（中立ち）が一人で心配するよりムラに問題が生じたのだからムラで解決しようと伝える。

⑫ うれしやな風が霞を巻き上げて女獅子男獅子肩を並べろ

と歌う。いろんな問題が吹き飛ばされ、とりあえず、隠れていた二人にムラに戻ってこいといっているように聞こえる。

⑬ いせ雀金のなりこにおどろいて羽をそろえてがんとたつ

と歌う。ムラ人は噂をしていたが、ムラの裁きに噂が消えたと聞こえる。

⑭ うれしやな風が霞を巻き上げて女獅子男獅子をぞうれしやな

と歌う。問題を解決し、結婚の許しに二人が喜んで帰ってきたと聞こえる。

⑮ きやうから下りた唐絵のびょうぶ一重にさらりとひきあわせる

と歌う。ムラ人の前で正式に結婚式を行ったと聞こえる。

⑯ 松山の松にからまる鶯の実も縁がつかればほろりほぐれる

と歌う。しかし、このように全てがうまくいくことはない、縁があればできることといい、縁がなければ結ばれていたと思っていた縁も切れると、教訓を伝える。

⑰ 奥山に住みし小獅子が里え出て是のお庭で羽を休める

と歌う。駆け落ちした二人が、ムラに戻ってきて生活を始めたと聞こえ、物事がハッピー・エンドに終わったことを伝え、問題が解決して再びムラに平和が戻ってきたのである。

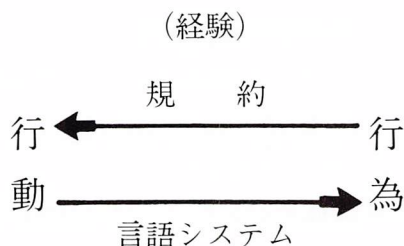
ここで男獅子、女獅子、中立ちは仲良く「めでたし、めでたし」と舞い、結婚騒動に決着がつきドラマが終わる。

以上のことから、「四句割り」の唄には、ムラに起こった問題をどのように解決していくか「結婚騒動」を題材に歌っていることがわかる。これはただ単に、一番起りやすい結婚問題を題材に

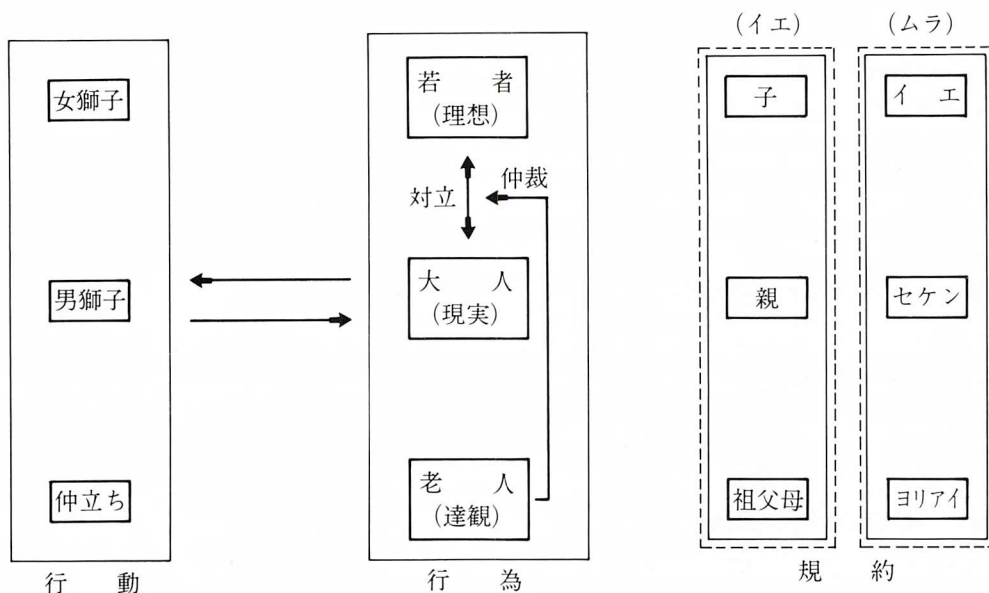


三沢の獅子舞資料 「四句割り」の唄 ③の歌詞がない

問題解決システム



(唄)



した唄であって、ムラに起った問題はこのシステムを通して解決されるであろうことが理解できる。このシステムは次のとおりである。

「四句割り」は、唄（言葉）があることによって、ムラでの問題の解決方法を直接的に教える機能を持っており、その解決方法を結婚騒動を題材にわかりやすく教えていたといえる。また、「四句割り」は、見る者にとっては、この唄を気持ちのなかで変換すればイエやムラで起った自己にまつわるいろんな出来事を思い出させるのであろう。

このことを整理すると、三沢の獅子舞の「四句割り」の行動（舞）は、言語システム（唄）を通じてムラの行為（教訓）が浮かび上がっている。この言語システムは、ムラで生活することによって知り得る規約（経験）に基づいて構成されているのである。<sup>(4)</sup>

それでは、最初に問題にしたお婆さんは、いったいどのように見て涙したのだろうか。それは下三沢で生活してきた「涙したお婆さん」にしかわからないことである。「四句割り」は、涙したお婆さんだけでなく、若者も大人も年寄りも子供も、それぞれ下三沢での生活を振り返りながら見ていたのである。

## おばあさんの涙 Part 2

三沢の獅子舞の唄のパターンで歌われる獅子舞に、皆野の獅子舞と、黒谷の獅子舞がある。事例

を示せば

(5)  
皆野の獅子舞

まわれまわれ水車おそくまわりて関に迷うな  
我親の植えて育てた姫小松一枝たよめて腰を休めな  
思いもよらぬ朝霧がおりてそこで女獅子をかくされたよな  
仲立ちの腰にさしたる小脇差つばもめぬきも黄金なるものよ  
奥山の岩に女獅子が巣をかけて岩をくだいて女獅子尋ねる  
山雀が山がういとて里え出てこれのお庭へもどりうたばよ  
あら川のあいのおさえもどりうつそれを見まねてもどりうたばよ  
天竺のあいそめ川原のはたにこそしゆくせむすびが神のたたれよ  
まことにもしゆくせむすびが神ならば雌獅子雄獅子をむすびあわせろ  
天竺の笛と太鼓の音すれば雌獅子雄獅子が肩を並べる  
仲立ちの中で心をしゆくさより出でて我等も肩を並べる  
とともたつなみいま一度よさとともたつなみ今一度よさ  
海の戸中の浜千鳥波にゆられてぱっと立ち揃う  
うれしなや風が霞を巻き上げて雌獅子雄獅子うさうれしなや  
京から下り唐絵の屏風ひとえにさらりとひきやまわせる  
松山の松にからまる鶯の実も縁がつけばほろりほぐれる  
いつまでも遊びたけれど日も暮れるおいとまもうしてもどり子ささら

(6)  
黒谷の獅子舞

二十日市また立ちかえり来て見れば黄金小草が足にからまる  
吾親が植えて育てし姫小松一枝たおめて腰を休める  
思いもよらず朝霧おりてそこで女獅子をかくされたよな  
山雀は山がういとて里に出てこれのお庭で羽を休める  
山雀はさしこの中でもとりうつそれを見まねてもとりうつはとともともうつなら今一度よな  
奥山の岩に女獅子が巣をかけて岩を砕いて女獅子たずねる  
奥山で笛と太鼓の音すれば女獅子男獅子結び合わせる  
中立は中で心千草より出でて我等もかたを並べる  
天ちかくあいそめ川のはたにこそ千草結びの神のたよりよ  
海のとなかの浜千鳥波に揺られた人とたちそろ  
嬉しな風に霞みまきあげて女獅子男獅子おさうれしや  
京から下りの唐松の屏風一重さらりとひきあわせる

松山の松にからまるつたの実も縁がつきればほろりほぐれる

いつまでも遊びたけれど我が国に雨の降りそな雲が立ち上のお庭で腰を休める  
である。

同じパターンではあるが、最後の唄に違いがみられる。三沢の獅子舞の唄がハッピー・エンドであったのが、この二ヶ所では生活を始めたとは言っていない。「いつまでも遊びたけれど……」と歌い、獅子舞が終わることを伝えているだけで、「結婚はさせても、縁がなければ結ばれません」と、少し突っぱねたところが見られ、三沢より教訓的である。また、皆野の獅子舞の最後の唄は、多くの獅子舞が終演を告げるために歌う唄で、席をたつときのタイミングを教訓的に歌う唄でもある。それに比べて、黒谷の獅子舞の最後の唄は、三沢と皆野の唄を合作したようで、また終わりのモチーフを「雨」としたところに特徴がある。この、「雨」も多くの獅子舞で歌われるモチーフで、「雨乞い」につながる唄でもある。

また、このパターンの唄の一部分を歌うところもある。浦山の獅子舞の「飛び剣」では  
奥山で笛と太鼓が音すれば雌獅子雄獅子がはねを休める

山雀は山がういとて里に出てこれのお庭で羽を休める

荒川のせきの白波あとへひく千鳥や吾等もあとへ引こうか

と歌う。こう短くなると、何が問題であったのかわからなくなる。だが、三沢のパターンを頭に入れて聞くと、奥山で男女が隠れて生活している、やはりムラに帰りたいといってここに来ている、波が引くように引き下がる時は引き下がろうといい、若者も大人もお互いに譲り合おうと歌っており、やはり結婚騒動を題材にしていることがわかる。

矢行地の獅子舞の「白刃」<sup>(8)</sup>は、

まわれまわれをそくまわりて関に迷うなをそくまわりて関に迷うな

荒川の立つ白波もあとをひかばよえんが我等もあとをひかばよ

奥山の松にからまるつたの葉も縁が切れればほどりほどほぐれ

と歌う。これも、先のパターンを頭に入れて聞くと、やはり結婚騒動の一部であることがわかる。

### おばあさんの涙 Part 3

次に、その他の獅子舞の唄を見てみる。

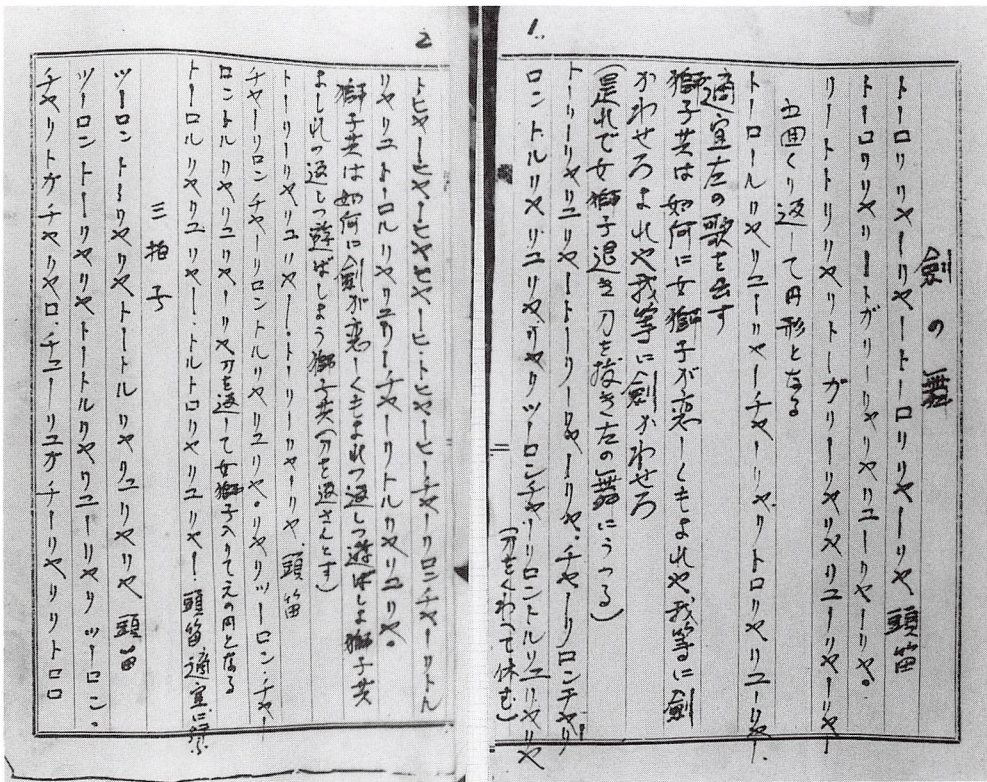
浜平の獅子舞<sup>(9)</sup>は、

十七が今年初めてササラするよくはなけれど見てたもれ

十七の胸に下がりし二つ桃一つ食べれよ恋の葉に

と歌う。これは、浜平ではどの演目でも歌われる唄で「剣掛かり」に特徴的に歌われるわけではない。意味は、17才の男の子は獅子舞に加入することで一人前のムラ人になり17才の女の子は結婚できる年となり、それぞれが子供からムラ人あるいは大人になったことを歌っている。獅子舞加入の年令が17才ではなく、7才の所もある。浦山の獅子舞<sup>(10)</sup>は、

七つ子が今年初めてささらするよくもあしくもほめてたもれ



池田の獅子舞 「剣の舞」のジゴトと唄

ジゴトは、笛の音を言葉で表現したものである。いわば…楽譜…である。池田の獅子舞に限らず多くの獅子舞が、この方法で笛の音を伝えている。またジゴトは、舞そのものも制限する。

と歌い、7才が加入の年令であることを告げる。

17才には、

十七の前にさかりし二つもの一つたもれよ恋の葉に

と歌う、三峰の獅子舞がある。さらに、結婚を思わせる題材を歌うのは、池田の獅子舞の

獅子どもは如何に女獅子が恋しくもよれや我等に剣かわせろよれや我等に剣かわせろ  
渡瀬の獅子舞の

獅子どもは如何に女獅子が恋しくもよれよ我等に剣かしょばしょ  
があるが、意味はよくはわからない。

下郷の獅子舞は、

わが里は雨が降るやら霧がまく早く我が家へ帰りくたされ

と歌う。これは、ムラ社会のなかでの身の引き際を教訓として説明している。また、「雨」をモチーフとして歌っており、「雨乞い」を連想させる。久那の獅子舞は、

いつまでも遊びたけれど日は暮れるいとま申して別れもどるぞ  
と歌う。これも身の引き際を説明しているのである。しかし、久那では「剣掛かり」は最後に舞われる演目でもあり同時に唄は終演も告げている。もっと明確に身の引き際を教訓的に歌うのは、花桐の獅子舞の<sup>(16)</sup>

ねぎ殿は今が盛りと打ち見えて綱の足駄で下座をなされる  
である。祭典が終わって行われる直会を想像させ、席を立つタイミング、楽しい席に長居をしたい気持ちを端的に表現し、ムラ人に一番理解しやすいように伝えている。その他、この教訓に類する唄を歌う獅子舞は、芦ヶ久保の獅子舞の<sup>(17)</sup>

いつまでも遊びたけれど日もまわるいとまもらってかえる小ささら  
下名栗の獅子舞の<sup>(18)</sup>

日は暮れる道のみさだに露がいるおいとま申していざやともだち  
小杉の獅子舞の<sup>(19)</sup>

日の暮れて月のめざさに戯れて（腰湯して、さらしもうして）帰る獅子殿  
大野の獅子舞の<sup>(20)</sup>

日も暮れるお日はお西へお入りやるいとまごえして戻る獅子  
金崎・国神の獅子舞の<sup>(21)</sup>

美しい剣の光に驚きて納めて帰る今日の獅子舞  
などがある。同時に、これらの『剣掛かり』は、演目の中でも最後に舞われ、唄は終演を告げる唄でもある。

久長の獅子舞は、<sup>(22)</sup>  
がんどうが糸にまかれて昇れども天の光で中が輝く  
と歌う。普通は起らないことが起ったと歌い、地元が神の恩恵を受けた素晴らしい所であると、ムラを誉める唄を歌う。下名栗の獅子舞は、<sup>(23)</sup>

天からおりし唐絵の屏風ひとえにさらりと押しひらかいな  
と歌い、下名栗を「唐絵の屏風」に例えている。ムラを誉める唄に類するのは、浦山の獅子舞の<sup>(24)</sup>

大日如来御本殿は四方四面でしめたれ木しな  
大日如来の三五のきざはし瑠璃の縁に瑠璃の欄干かけやわたしな  
と歌い、獅子舞の舞われる大日堂の素晴らしさを歌っている。<sup>(25)</sup>  
矢行地の獅子舞は

うぐいすが梅の小枝に昼寝して京の栄えを夢に見た  
と歌い、平和なムラを表現している。

また、剣の素晴らしさを歌っている唄もある。先に述べた金崎・国神の獅子舞の歌う唄であるが、<sup>(26)</sup>  
その他に浦山の獅子舞は、

しく太郎の腰にさしたる小脇差すらりと抜けば光り輝く  
と歌う。「太郎」と長男を歌い、長男のムラ社会のなかでの重みを感じられる。池田の獅子舞は、<sup>(27)</sup>  
獅子どもは如何に剣が恋しくもよれつかえしつ遊ばし獅子どもよれつかえしつ遊ばし獅子ども



(28)  
渡瀬の獅子舞は、

我々は如何に剣が恋しくもよれつかえせつ遊ばしいかな  
と歌う。しかし、池田と渡瀬は、剣を女獅子と読み変えると、先に示した男女の間を歌う唄にもなる。

次にムラのお祓いを行うという唄もある。下名栗の獅子舞<sup>(29)</sup>は、  
この獅子は悪魔を払う獅子なれどあまりくるうてつのもがすな  
と歌い、一生懸命舞ってもいいが悪魔を払う獅子だから壊さないでおくれとお願いし、若者の力を押さえることも歌っている。高山の獅子舞<sup>(30)</sup>は、

千早降る神の前にて竜の舞天下太平国土安穩  
二丁目の獅子舞<sup>(31)</sup>は、

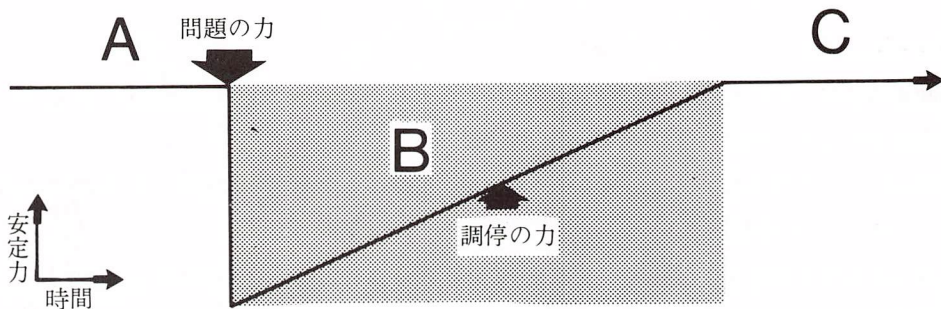
千早降る神の斎垣に弓はりてあたりを固めあらたかに  
牧西の獅子舞<sup>(32)</sup>は、

この太刀は備前の神の打った太刀悪魔払いば神もよろこぶ  
と歌い、「剣」あるいは、「舞」自身が悪魔払いであることを伝えている。しかし、二丁目の獅子舞<sup>(33)</sup>は演目の構成から他の獅子舞とは違っているので、『剣掛かり』の唄という範囲からは除き、獅子舞全体の持つ祈禱性から考えた方がよいであろう。また、牧西の獅子舞はこのムラには素晴らし  
い「剣」があるとも歌うが、ここでは悪魔払いの要素を重く見る。

芦ヶ久保の獅子舞<sup>(34)</sup>は、  
御殿様召した袴は七折目折目折目に少女重なる  
と歌う。御殿様の袴を誉めているように思えるが、「折目折目に少女重なる」と歌えば、ある人を非難した唄ととることもできる。したがって、ムラのなかでは言動には十分注意しなければ人に非難されますよと、教訓を教えているのである。

## まとめ

『剣掛かり』の唄を通して知り得たことは、唄はムラのなかでの生活の安定を維持するために教訓を歌っているということである。



ムラ社会の安定度

問題の起因から解決までを時間軸にのせると、図のようなムラ社会の安定度の変化が考えられる。問題の深刻さは、A：問題の起こる前、B：問題の調停、C：問題の解決後とそれぞれゾーンを設けて考えると——問題の大きさによってBゾーンの深さが決まり、また、Bゾーンの深さによってBゾーンの長さが決まり——このBゾーンの面積で示すことができる。安定度は、図からは元に戻っているように見える。表面はこのようになる。しかし、何かをムラ人に残しているのも事実である。ムラ社会においては、問題を解決してからは、Bゾーンの時間を意識的に忘れ、何事もなかったような生活が続けられるのが常だから。

このことを三沢の獅子舞の「四句割り」の唄に例をとってみる。

	教訓の題材	結婚騒動	
①～②	プロローグ	ムラの様子（平和）	Aゾーン
③～⑤	問題の発生	駆け落ち	Bゾーン
⑥～⑩	調停1	こじれる	
⑪～⑬	調停2	調停	
⑭～⑯	解決	承認	
⑰	エピローグ	ムラの様子（平和）	Cゾーン

と歌われている。

したがって、お婆さんの涙はAゾーンとCゾーンの生活の安定度には、見えない差があることを表しているとともに、証明していることになる。こうならないために『剣掛かり』の唄にはBゾーンに関する教訓が一番多く歌われているのであろう。

最後に、調査にあたっては、獅子舞の方々には多くのことを教えてもらいました。特に、矢行地の獅子舞の方々には、完全に復活していない芸態でしたが、実演していただいた。ここに記して、感謝の意を表します。

## 注

注1 埼玉県立民俗文化センター（1988）投げ込み解説

注2 同上の音源

注3 柳田国男監修（1955）ジュウサンマイリの項

注4 第44回日本人類学会・日本民族学会連合大会（1990）における中川敏氏（行為における意図と規約）の発表を参考にした。

注5 埼玉県教育委員会（1972）94ページ〔埼玉県教育委員会（1982）皆野町（1986）〕

注6 同上83・84ページ

注7 倉林正次（1970）254ページと鳥居龍男（1969）14ページでは、収集された唄に差が見られる。

ここでは、地元出身という鳥居が収集した唄によった。倉林は、これ以外にくるりと廻れよ水車遅く廻りてせきに止るな  
七つ児が今年初めてささらするよくもあしくもほめてたもれ  
しく太郎の腰にさしたる小脇差すらりと抜けば光りかがやく  
を加えている。

注8 筆者調査 矢行地には「剣」に関する演目は「白刃」と「太刀掛かり」がある。これは「白刃」に歌われた唄である。

注9 筆者調査

注10 鳥居龍男（1969）13ページ

注11 三峰神社誌編纂室（1972）359ページ

注12 筆者調査

注13 同上 地元の聞き取りにおいては、終わりの言葉に不一致が見られた。

注14 倉林正次（1970）247ページ

注15 古野清人（1968）243ページ

注16 埼玉県教育委員会（1972）39ページ

注17 埼玉県教育委員会（1982）23ページ

注18 埼玉県立民俗文化センター（1989）投げ込み解説

注19 埼玉県教育委員会（1972）52ページ

注20 埼玉県教育委員会（1972）77ページ

注21 小野寺節子（1988）39ページ

注22 埼玉県教育委員会（1972）87ページ

注23 埼玉県立民俗文化センター（1989）投げ込み解説

注24 倉林正次（1970）252ページ ただし、この唄は鳥居龍男（1989）は「幣掛かり」の唄（11、12ページ）とし、「剣掛かり」の唄（13ページ）は  
七つ子が今年初めてささらするよくもあしくもほめてたもれ  
しく太郎の腰にさしたる小脇差すらりと抜けば光り輝く  
としている。

注25 筆者調査 「太刀掛かり」に歌われた唄である。

注26 前掲の倉林正次（1970）・鳥居龍男（1969）より

注27 筆者調査

注28 同上 地元の聞き取りにおいては、終わりの言葉に不一致が見られた。

注29 埼玉県立民俗文化センター（1989）投げ込み解説

注30 倉林正次（1970）274ページ

注31 八潮市教育委員会（1988）59ページ

注32 古野清人（1968）251ページ

注33 八潮市教育委員会（1988）49～68ページ

注34 埼玉県教育委員会（1982）23ページ

注35 今回取り扱わなかった唄に以下の唄がある。

門平の獅子舞の唄は、

奥の宮は鳴る雷のおきやるがごとくにそのごとくなる

若殿はたかおたかおと責めかけられてたかが揃えば巢のばえうづく

鹿島のえびすは村むら雀羽先そろえて切り返しかな

と歌う。ここでは、特に「剣掛かり」の唄はなく、歌うときは「歌師匠の唄」の中から選ぶといい、先の唄がある。門平の隣の耕地の大神、奈良尾にも獅子舞があり、同じ芸態の「剣掛かり」が舞われる。これらには、唄は歌われないという（筆者アンケート調査）。また、大野の獅子舞（注19参照）は、先に上げた唄以外に

このお茶は大茶か小茶か宇治の茶か旅の疲れでのむがしれない  
とも歌っている。

## 参考文献

埼玉県教育委員会（1972）：埼玉の獅子舞

埼玉県立民俗文化センター（1988）：三沢の獅子舞（LPレコード）埼玉の民俗音楽 獅子舞シリーズ2

埼玉県立民俗文化センター（1989）：下名栗の獅子舞（LPレコード）埼玉の民俗音楽 獅子舞シリーズ3

内藤ふみ・石川博行（1988）：三沢の獅子舞における曲目の構成と伴奏 埼玉県立民俗文化センター 研究紀要第5号

石川博行（1990）：埼玉の獅子舞『剣掛かり』について 埼玉県立さきたま資料館調査研究報告第3号

小野寺節子（1988）：金崎獅子舞における曲目の構成と伴奏 埼玉県史研究第21号

埼玉県教育委員会（1982）：埼玉県民俗芸能緊急調査報告書第4集 獅子舞の分布と伝承

八潮市教育委員会（1988）：八潮の文化財第3集

飯能市（1983）：飯能市史資料編IV（民俗）

倉林正次（1970）：埼玉県民俗芸能誌 錦正社

鳥居龍男（1969）：正統元祖獅子舞の由来

皆野町（1986）：皆野町誌 資料編5 民俗

古野清人（1968）：獅子の民俗－獅子舞と農耕儀礼－民俗民芸双書32 岩崎美術社

柳田国男監修 民俗学研究所編（1955）：改訂総合日本民俗語彙第2巻 平凡社

第44回日本人類学会日本民族学会連合大会事務局編（1990）：第44回日本人類学会日本民族学会連合大会プログラム抄録集

三峰神社誌編纂室（1972）：三峰神社誌 民俗篇第2分輯